

内戦下にあるアンゴラの 人々と暮らし

池谷和信

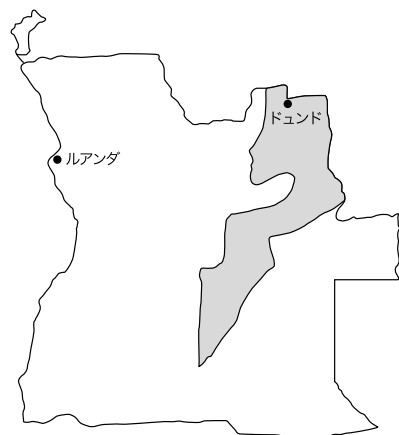
1 アンゴラへの道

アンゴラは、南部アフリカの中で経済的にも政治的にも注目すべき対象である。石油やダイヤモンドなど豊かな資源をもち、長年にわたってUNITA（アンゴラ全面独立民族同盟）とMPLA（与党、アンゴラ解放人民運動）との内戦が続いている。アンゴラはまた、民族文化の視点からも興味深い。国内には、バントゥー系を中心にコイサン系を含めて93の多様な民族集団が生活している。そして、UNITAと南部の人口密度の高いビエ高原に暮らすオヴィブンドゥ（Ovimbundu）、MPLAと首都ルアンダやマランジェに多いキンブドゥ（Kimbundu）とは関係が深いと言われるが、各政党の中でそれらの民族の占める比重などについて不明な点が多い。私が研究対象にしているチョクウェ（Tshkwe；図1）はアンゴラ国内で最も広い地域に生活しているが、昨今アンゴラ内戦の資金源として取り沙汰されているダイヤモンド・ビジネスにおける彼らの関与の程度は、よく分かっていない。それでも、仮面や椅子などを対象にしたアフリカン・アートの研究では欠かせない存在にな

っている。

これまで私は、ポルトガルのリスボンでアンゴラの民族学的研究の動向を調べてきたが、アンゴラが独立した1976年頃に研究が止まっていることに気がついていた。植民地行政官であったリスボン在住の民族学者も、アンゴラに25年間も滞在したが帰国後は現地のようなすを知らないという。リスボンに出稼ぎに来ているキンブドゥの若者からわずかな情報を入手できる程度であった。イ

図1 チョクウェの居住地域



(出所) Lima, *Carta Étnica de Angola*, Instituto de Investigação Científica de Angola, 1970.

インターネットからは内戦の最新情報を把握できるものの、実際の所は現地に行かなければわからない。

幸い私は、「親指ピアノ」とチョコウェの民族文化とのかかわりを主な研究目的として、2001年1月中旬から2月上旬にかけて約3週間にわたり、アンゴラに滞在することができた。現地では、ルアンダの国立人類学博物館の協力をえて、北ルンダ州で調査を行なった。

アンゴラでは、野外で写真を撮影するためには許可証が不可欠である。このために観光客でも自由に写真撮影ができないこと、持ち出されるみやげ物が10点以下と制限されて、しかも印紙が必要という規制があることを付記しておく。

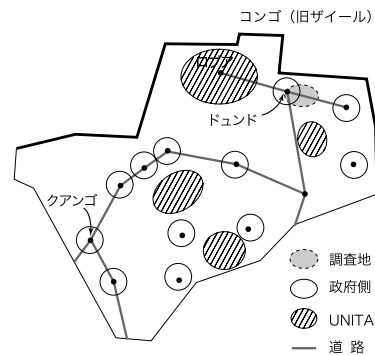
2 UNITAの動き

アンゴラで現地調査をする際には、UNITAの動きを把握することから始まる。そこで私はルアンダの国連事務所最新の治安情報を集めることで、UNITAのおおよその支配地域を推定してみた。例えば2001年1月25日にウイジェ（ウイジェ州の州都）の近くのブンゴでUNITAに襲われて住民2人が死亡しているが、このように各地でUNITAによる被害が頻発している。しかし、道路の結節点に当たる都市部は、ほぼ政府軍が支配していることがわかった。

当初、地雷が多いということで、地方へ行けるとは思っていなかった。1300万個といわれていた地雷数は、実際は約400万個程であるらしいことがわかってきたものの、それにしても国内で陸路を使って安全に移動できるところが限られている。最近では、ルアンダ周辺も危険であるということで、陸路では一歩も外にでられないという。

国内は17州に分かれているが、それぞれの州の

図2 2001年1月のUNITAの勢力範囲
(北ルンダ州の事例)



(出所) 筆者作成。

詳細な情報は、現地でしか最新の情報を集めることができない。私は、北ルンダ州にて地元のジャーナリストや難民キャンプの人びとに聞き込みをすることでMPLA、UNITA双方の勢力図を作成してみた(図2)。北ルンダ州でも州内の主な町とそれらを結ぶ道路沿いの村は、ほぼ政府軍が支配している。州都ドュンドから地方都市のあいだにはミニバスが運行している所もある。

しかし、私たちが調査を終了してドュンドにもどった2001年1月30日早朝、調査地の近郊(ドュンドから90キロメートル点)で、追いはぎによる攻撃によって9人の乗ったミニバスが襲われ、現地の住民4人が殺される事件が起きた。これは、その年になって初めての殺傷事件であった。この事件が、誰の仕業かはわからないが、UNITAのおこしたものであると主張する人もいた。昨日までは安全であるといわれた所が、ひとつの事件によって大きくイメージが変わってしまうものだと痛感した出来事である。

3 ルアンダでの都市の暮らし

まず首都ルアンダの空港では、飛行機の数が見

いへん多いことに驚かされる。この飛行機こそが、内戦下で各地の町や村に物資を運搬するための原動力になっているのであった。

ルアンダを空からみると、海岸部に接してトタン屋根の巨大なかたまりが光ってみえる。樹木が少なく、街全体がほこりっぽい。空港は、そのトタン屋根のかたまりに接しており、街の中心からわずか5キロの所に位置する。

現在、ルアンダの人口は、300万人以上に膨れ上がっているといわれる。ここは北海道の野付岬のような砂嘴に丘のある街であり、近くのムスコ島には美しい砂浜がある。市内では、キューバ人が建設したという数階建てのアパートや、オランダから輸出されたミニバスが目立っている。

路上ではあらゆるものが売られている。ストリートチルドレンはみられず、地雷の被害を受けた片足の元兵士が物もらいをする光景をみかける。何でもそろうキナシ市場やロッキーサンティロ市場は活気に満ちあふれている。この街には、キンブドゥを中心にして商売じょうずなキコンゴ、チョクウェ、ムラート（黒人と白人の混血）、それに数人の日本人を含む多数の外国人が暮らしている。

現在、内戦の影響などによって、地方から町へ、あるいは直接にルアンダに移動してくる人々は多い。私は、北ルンダ州からやってきて空港の近くに住むマリオ・カソカさんの家を訪れた。彼女はチョクウェの女性で長屋に住んでいる。部屋にはテレビやベッドが置かれ、ゆとりのある生活ぶりである。

彼女は運び屋である。ルアンダと町や村とのあいだを結ぶ飛行機を利用して、自分の出身地である北ルンダ州の村に鳥肉などの冷凍食品を運び売っているのだ。トタン屋根の家の家賃は月に70ドルで、5歳、3歳、1歳の子供を持つ。都市に住んではいるが、5歳の子は、“ムカンダ”という

チョクウェの割礼儀式を病院で行なうという。この家には水道がなく、20リットル当たり5クワンザ（約30円）で水を購入しなければならない。

その頃、ちょうど地方から友人ソニャさんがやって来ていた。彼女もまた、普段は北ルンダ州クアンゴに住むが、ルアンダからそこにビールや清涼飲料水を運ぶ仕事に従事している。毎日、そこへ行く貨物便があるので、それに便乗するのだという。運び屋には女性が多いという。

4 ドュンド周辺での地方の暮らし

デュンドは、アンゴラの北東部に位置する人口約3万4000人の町である。ルアンダからは定期便で1時間15分かかる。この町はサバンナの高原にあるので、ルアンダと比べると涼しい気候である。ここは植民地時代にダイヤモンド会社によって作られたレンガ造りの家並からなる旧市街と、地元の人々の住居から構成されている。

この地域の物価は大部分のものが空輸であるために高い。例えば、1リットルのディーゼル・オイルは360円、ガソリンは420円でルアンダの約30倍である。また、コココーラやビールの価格は、ルアンダの約2倍の180円である。バナナ2本は60円で、日本より高い。

デュンドの町は多数の政府軍兵士がおり、UNITAを支持する人はいない。2000年度には、この町の近くで約10回のUNITAによる事件が起きているというが、最近では平和であるらしい。町に住んでいる人々も、すっかり“平和ぼけ”しているようにもみえる。この町はチョクウェの人々が多いのであるが、15人のベトナム人が目立っていた。彼らの多くは医師や教師であり、コピー業（1枚30円）を副業にしている人もいる。

この地域の経済の中心はダイヤの生産である。

それには、二つのタイプがある。一つは政府が特定地域の採掘権を独占し、デビアスなどの会社と契約しているものである。もう一つは、個人が採掘して取引人に売却するものである。デュンド近郊では、大勢の人が、毎日、2～10メートルの深さの穴を掘っている。川の中に潜水して探す人もいる。普通はスコップとふるいのみでダイヤを捜す。2カ月間探しても何も見つからないことがあったり、時には短期間で300ドルに相当する原石を見つけたりと不安定な職業である。ここでは、多くの人が一獲千金を夢見ている。そして、原石を購入する取引人が、デュンドの町に暮らしている。その仕事は、警察官の副業にもなっているのだ。

これまでUNITAはダイヤのヤミ取引によって武器を入手し続けているといわれてきた。近年ではデビアス社との取引が打ち切られているというが、地元のダイヤ取引人がUNITAに関与している可能性はある。アンゴラ内で最もダイヤの豊かな北ルンダ州では、チョクウェのダイヤ生産・流通とUNITAとの関係は重要なテーマであるといわなければならない。

私たちがデュンド近郊の難民キャンプを訪れた時のことである。ここには、約3000人の人が住み、ソバーと呼ばれる14人の伝統的なヘッドマンがいる。私たちは村に着いて彼らに挨拶をすませたあとに、UNITAが彼らの村にやってきた際のような話を聞いた。彼らの話によると、1998年3月、ロブア村がUNITAの軍隊に襲われた。そのため、村人の半分はコンゴ(旧ザイール)側へ、残りはここに逃げてきたという。村人のなかにはUNITAに捕らえられ奴隷のようにになっている人もいるという。また当初、この難民キャンプでは食糧援助があったが、現在ではまったくみられなくなったらしい。

もともとダイヤモンド会社で働いていたというヘッドマンは、難民キャンプの近くでキャッサバを栽培している。他に、木炭を売る人、小型の野生動物の肉を売る人がみられ、難民キャンプの人たちは、換金できるものなら何でも仕事にしているのだった。

5 住民にとって内戦とは何か？

アンゴラは、鉱物資源が豊かな国である。しかし、そこから得られた収益が地方の公共投資には還元されていない。とくに博物館の整備や管理などの文化面の投資はかなり遅れている。また、この国で事を押し進めるには、ソフトドリンクを示すガゾーザ(gazosa)と呼ばれるワイロが不可欠のようにみえる。

このように内戦下で国家によるあらゆるサービスが機能しない中であっても、人々の暮らしは営まれている。内戦下では国内の道路網の閉鎖によって国内流通システムが十分に機能していないという問題が生じ、UNITAの攻撃によって多くの人々が、都市や幹線道路沿いに移住している現実がみられる。しかし、デュンドのような地方拠点を中心とした飛行機を利用した地域経済網が形成されつつある。

ここでは内戦の犠牲になった人々がいる一方で、難民キャンプではキャッサバ農耕を開始するなど生存のための農業が行なわれている。私は、都市から地方に物を運搬する運び屋や、ますます都市部で活発化してきたもの売りなどように、内戦下であってももしたたかに生きる人に強い印象を受けたのである。

(いけや・かずのぶ／国立民族学博物館
民族社会研究部)